日本医史学雑誌　第65巻第4号（2019）　440–457

華岡青洲の撰による「青嚢秘録」の書誌学的研究
――とくに初期の写本と全身麻酔薬を中心として――

松木　明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成30年11月20日／受理：令和元年6月12日

要旨：華岡青洲は非伝統的処方である奇（禁）方を治療上極めて有用であると考えて収集した．青洲の高弟本間玄調は1850年に奇（禁）方集の一つである「青嚢秘録」を再編集したが，「青嚢秘録」の書誌，成立年に関しては殆んど知られていなかった．著者は36本の写本を精査して，春林軒の門人原澤　誼が1814年に書写した一本が現存最古であることを明らかにした．原澤の識語によって初稿本は1810年頃に成立したと推定される．多くの写本は200方前後の奇（禁）方を収載している．その中の6方が全身麻酔薬の処方で，5方は中国系，1方はオランダ系であった．本稿では「青嚢秘録」の初期の写本の書名，内容などの書誌的事項について考察を加えた．

キーワード：華岡青洲，青嚢秘録，原澤　誼，全身麻酔薬，非伝統的処方

はじめに

華岡青洲（以下「青洲」）は1832年に長子雲平（号は葛城）に先立たれた．このため青洲の跡を継いだのは次子の修平（号は鷺洲）であった．その頃，大坂の合水堂は青洲の末弟の鹿城，春林軒の古参の門人で後に華岡姓を名乗った石堂　鼎[1]に次いで三代目の主宰者として華岡南洋（青洲の次女「かめ」の婿準平）が門人を教育していた．その南洋の主宰する合水堂の門人佐藤持敬（号は敬斎）が1861年に編集した「華岡氏遺書目録」[2]は青洲の著述として「瘍科神書」以下72種を掲げている．しかし，その中の「禁方拾録」（「禁方録」と異名同書）など13種は後に呉　秀三が「華岡青洲先生及其外科」[2]の中で補充したものである．これは当時すでに春林軒や合水堂の蔵書が混乱散失し始めていたことを物語る．これらの著述を大別すると，「瘍科神書」（「外科神書」など多数の異名同書が知られている），「瘍科瑣言」，「産科瑣言」に代表される外科，産科などの各分科の著述（口述の記録），「青洲医談」，「灯下医談」（これらも口述の記録），「華岡留熱漫録」（「華岡留塾漫録」の誤り），「青洲先生治験録」に代表される治験，見聞録などの記録，「乳岩辨証」，「疔瘡辨明」に代表される個別の疾患の著述に加えて，「丸散便覧」，「禁方（拾）録」，「続禁方録」，「青嚢秘録」などの処方集が14種の多くを数える．このことは青洲の医学において処方，とくに非伝統的処方，つまり奇（禁）方が甚だ重要な位置を占めていたことを示している．

青洲の初期の業績が漢方の処方に関するものであったことは，成立年代が特定可能な著述の中で，1790年の「丸散便覧」[3]が最も古く，1791年の「禁方（拾）録」[4]がこれに次ぐという事実を見ても直ちに了解される．両者共に処方に関する著述であって，個別の疾患や外科の治療法に関する著述でなかったことが注目される．「華岡氏遺書目録」[2]に見られる14種の処方集の一冊「青嚢秘録」は「華岡氏遺書目録」[2]の著述全体の中では11番目，処方集の中では「内科撮要方」，「瘍科方筌」，「丸散方」，「丸散方考」，「丸散便覧」，「膏方便覧」に次いで7番目に掲げられている．「華

岡氏遺書目録」[2] における書名収載順序の根拠は明確でないものの，広く読まれた程度に従って順番に示した形跡もあり，このことは「青嚢秘録」の写本が「瘍科神書」[5]，「瘍科瑣言」[6] と同様に現在比較的多数遺されている事実を説明するものであろう．

「青嚢秘録」が重要とされる一つの有力な根拠は，この著が青洲の高弟本間玄調（以下「玄調」）の選定した「春林軒二十一種」[7] の中に収められていることである．玄調は青洲の著述が書写の繰り返しによって書名や内容に混乱が生じていることを憂いて数年を掛けて写本を収集し，青洲の正統な著述を後世に遺すべく二十一種を選定して1850年に全十五集にまとめた．その第九集に「青嚢秘録」[8] が「奇方記聞」，「脚気翼方」と共に収載されている．このことは玄調が「青嚢秘録」を後世に遺すべき青洲の著述の一つとして高く評価したことを示している．ただし，玄調がどのような基準で二十一種の著述を選定し，どのような理由で特定の写本を底本として選択したのかについては，玄調自身何も語っておらず，この「春林軒二十一種」[7] の実質的編集者であった玄調の門人小林定誠の「春林軒二十一集序」によっても明らかでない[9]．

このように「青嚢秘録」は青洲の撰述として高く評価されているにも拘わらず，その初稿本の編者はもちろんのこと，書名の由来，成立年代，成立の経緯，写本の系統などの書誌的事項に関してはこれまで全く知られていなかった．また青洲の撰になる「禁方（拾）録」，「続禁方録」など他の処方集との関連についても全く不詳である．さらに「青嚢秘録」には全身麻酔薬の処方が披見されるため，同じく全身麻酔薬の処方を収載している中川修亭編の「麻薬考」とどのような関係にあるかについても何ら情報が得られていない．著者は日本麻酔科学史研究の立場から，華岡流の全身麻酔薬の処方を収載していることが本著述の大きな特徴であると考えて，39本の「青嚢秘録」の写本を調査研究し，その成立に関係する初期の写本と全身麻酔薬の処方を中心に考察して，これまで知られていなかった重要な知見を得ることが出来たので報告する．

1.「青嚢秘録」に関する先行研究

「青嚢秘録」の書名を19世紀末までの青洲研究に関する論考中に見出すことは出来ない．つまり，この著述は殆んど忘れられた存在であった．この事実はまた「青嚢秘録」に関する先行研究は甚だ少ないことを意味している．青洲の事績の研究が本格的に行われるようになったのは，呉　秀三が1923年に「華岡青洲先生及其外科」を出版して以来であるが，その「第三巻　青洲先生ノ著述」[10] において引用された前述の佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」[2] 中に「青嚢秘録」の名が見出される．しかし，呉はそれ以外に「青嚢秘録」の書誌やその内容に関して具体的に何の言及もしてないし，「青嚢秘録」から処方も引用していない．

呉に次いで「青嚢秘録」に言及したのは関場不二彦であった．関場は1933年に上梓した「西医学東漸史話」の中で，青洲の著述に関して「瘍科瑣言」，「金創秘話」，「灯下医談」，「留熱漫録」（「華（花）岡留塾漫録」のことであろう）など二十数種を示している．その中で「療法」に傾注した著書として「痘疹要方」，「丸散方考」，「青嚢秘録」，「瘍科方筌」，「三朮附辨」，「華門膏方便覧」，「膏薬類方」を挙げているが，「青嚢秘録」については「青嚢秘録　外科，皮膚，婦人，小児諸科に亙り，当時最重要視せられし者を記してゐる．」[11] と簡単に解説している．「当時最重要視せられし者」の記述だけではこの書の大要を直ちに理解できない．「療法」とあれば一般的に「治療法」と考えるが，関場はこれを「処方」の意味で用いている．本書は処方集であって，外科，皮膚，婦人科などの治療法を述べた書でないので関場の記述は正鵠を得ていないし，誤解を招く解説である．

1964年，大鳥蘭三郎は「明治前日本外科学史」の中で青洲の事績に及んでいるが，青洲の主著の一つとして「青嚢秘録」の書名を示しているのみで詳しい言及は見られない[12]．1980年に至って「青嚢秘録」は「近世漢方医学書集成30」[13] に大塚敬節の所蔵本（以下「大塚本」）を覆刻して収載されることになった．その解題を記した宗田

一は「青嚢秘録」の項で以下のように解説している．

> 製薬法を記す．水薬（吉雄氏家伝），的理亜加（桂川氏伝），塗麻薬（吉雄伝，讃岐堀古膳伝，尾州入江又兵衛伝），癲癇妙方（加州多賀氏一子相伝）等々諸家の伝をも集録している．ちなみに，「ヒリリ」（ビリリ，Hiera picra，神聖苦味薬）の薬方に青洲は沈香を配合しているが，この処方は中沢厚沢の『弼離利考』（または『弼離力考』）にもとづくものとかんがえられ，事実，青洲の用箋（春林軒蔵と印刷した罫紙）を使った『弼離力考』の題名の写本があり，青洲は門弟にこれを筆写させて情報を集めていたことは間違いあるまい（宗田　一：日本の売薬30，医薬ジャーナル15巻6号，925頁，1979）．（大塚敬節氏蔵）[14]

宗田の記述は甚だ誤解を招く．「製薬法を記す」とあるが，本書は製薬法を記した書ではない．確かに処方名を示してその製薬方法に及んだ記述も含まれるが，それは大塚本に収載された全232方中冒頭に記された27方（約11.6%，27/232）のみであり，他の205方（88.4%，205/232）の記述は「禁方（拾）録」，「続禁方録」に示された処方の記述法と大差がない．したがって，これだけを以って本書を一概に「製薬法を記す」著述とすることは出来ない．また，宗田は上記のように局所に塗布する局所麻酔薬「塗麻薬」の3方に言及しているが，一層重要な，しかもより多くの6方を記載している全身麻酔薬の「麻薬」を全く無視している．処方は部分的に「婦人，小児」，「労咳」など疾患別，適応別にまとめられているものの，全体として見ると，本書は各種疾患に対する処方を順序不同に列記したものである．したがって，宗田の「青嚢秘録」の解説はその概略を示すものとしては甚だ不適切であろう．また大塚本が善本であるという根拠は何も示されていない．宗田以後「青嚢秘録」の書誌に関する論考は皆無である．以上がこれまでに発表された「青嚢秘録」に関する記述のすべてである．書誌的事項を含めて殆んど研究らしい研究がなされてこなかったことが直ちに了解されるであろう．

2. 調査対象の「青嚢秘録」写本39本の概要

著者が本稿で調査した「青嚢秘録」の写本39本の概要を一括して表1に示した．39本の写本の内，同名異書が3本ある．したがって実質的には36本の写本を研究対象とした．書写年の明らかなものは11本（二十一種本は1850年として）である．著者は，上記以外にも15本の個人蔵の写本の所在を知っているが，ほとんどは正確な書写年代を特定できない上に，200方以上の処方数を収載して比較的後年の写本と推定され，本書の初期の書名や写本の系統の考察には必ずしも必要にして不可欠な写本ではない．個人蔵で非公開であるため一般の研究者が容易に閲覧できないことから，本稿ではそれら15本の写本を研究対象から除外した．表1中の写本4（乾4240-2，写本3の副本と考えられる）を除いて，誤字，字句の脱落は別にして処方数，処方内容，記載順序は区々であり，同じ処方名でも味数，用量が異なるなどして一冊として同じ写本はない．このことは書写に際して，誤記の他に処方が追加ないし削除されたり，記載順序が適宜変更されたりしたことを物語っている．

書名に関して，36本中35本は外題，内題共に「青嚢秘録」であるが，写本27の原澤本では外題はなく，内題は「花陵青嚢神秘録」（「花陵」は「はなおか」と読む－松木注），巻末に記された題は「青嚢秘録」となっている．原澤本に関しては後に詳述する．写本の著者ないし撰者に関しては，過半はこれを欠くが，記載している場合「華岡青洲」，あるいは「青洲華岡」とする．写本7の早稲田大学本では「青洲花陵先生」となっているのが注目される．題名ないし撰者，著者の「華岡」を「花陵」と表記しているのは36本中，写本27の原澤本と写本7の早稲田大学本のみで，このことについては第4節で詳述する．同名異書は写本37～39の3本で，調査した39本の7.7%（3/39）である．いずれも全く異なる処方を列記したものである．単に処方集であることを示すため

表1　調査した「青嚢秘録」の写本の概要，所蔵施設および請求番号

題名	所蔵施設	請求番号	概要
1. 青嚢秘録（春林軒二十一種　九集）	杏雨書屋＊	乾 3169-9	外・内題共に「青嚢秘録」．1850年書写．書写者不詳．44丁．「二十一種本」と略．
2. 青嚢秘録（近世漢方医学書集成30所収）			外・内題共に「青嚢秘録」．書写年，書写者不詳．67丁．目次あり．「大塚本」と略．
3. 青嚢秘録	杏雨書屋	乾 4240-1	外・内題共に「青嚢秘録」．1830年藤浪謙貞の書写．44丁．目次あり．
4. 青嚢秘録	杏雨書屋	乾 4240-2	乾 4240-1を丁数，字数も合わせて書写したもの．
5. 青嚢秘録	杏雨書屋	乾 4240-3	乾 4240-1の抄本．
6. 青嚢秘録	滋賀医大河村文庫	K-0080	外・内題共に「青嚢秘録」．書写年，書写者不詳．25丁．目次を欠くが，項目別に記述
7. 青嚢秘録	早稲田大学	ヤ 09-00380	「早稲田大学本」と略．著者は「青洲花陵」，「春林軒丸散方記」と合冊．11丁．
8. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	35780	1826年の書写．18丁．目次に「麻沸湯　六方別書出」とあるが本文になし．
9. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	36182	外・内題は「青嚢秘録」．46丁．1828年，紀伊・羽山士明の書写．
10. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	35635	内題に「青嚢秘録　乾，坤」．27丁．1867年，森約之の書写．特異的麻薬の処方を記載．
11. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	31634	外・内題共に「青嚢秘録　完」．35丁．1847年矢野大順の書写．
12. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	30378	外題は「青嚢秘録　全」．21丁．「巳孟夏」に書写とあるが，年代の特定不能．
13. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	32327	外題「花家　青嚢秘録　全」，内題は「青の秘録　全」．44丁．書写者，書写年不詳．
14. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	33463	外・内題は「青嚢秘録　全」．44丁．書写者，書写年不詳．
15. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	30949	外・内題は「青嚢秘録　全」．43丁．目次あり．書写者，書写年不詳．
16. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	60396	外・内題は「青嚢秘録　完」．48丁．書写者，書写年不詳．
17. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	33058	「痢疾瑣言」と合冊．外題は「青嚢秘録　全」28丁．書写者，書写年不詳．
18. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	32292	外・内題は「青嚢秘録」．39丁．書写者，書写年不詳．
19. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	44359	外・内題は「青嚢秘録」．8丁．製薬の部だけを写した抄本．収載処方数は36方．
20. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	32615	外・題は「青嚢秘録」．25丁．200方を収載．麻薬は3カ所に分かれて記載．
21. 青嚢秘録	神戸大学砂地文庫	DIG-KOBE-130	1852年長谷川子敬の書写．48丁．「製薬」から始まり「麻薬」を含む．
22. 青嚢秘録	研医会図書館	請求番号整理中	赤褐色の表紙．題箋なし．32丁．麻薬の記載なし．書写者，書写年不詳
23. 青嚢秘録	研医会図書館	請求番号整理中	青色の表紙．題箋なし．外題は「脊法便覧」．35丁．書写者，書写年不詳
24. 青嚢秘録	研医会図書館	請求番号整理中	薄黄色の表紙．内題，外題共に「青嚢秘録」43丁．書写者，書写年不詳
25. 青嚢秘録	研医会図書館	請求番号整理中	「価原」に合冊．内容は21の写本に近似．書写者，書写年不詳
26. 青嚢秘録	慶応大学・富士川文庫	DIG-KEIO-182	外題は「青嚢秘録」．40丁．「麻薬」の項なし．1873年，「土方　圓」による書写，
27. 青嚢秘録	高橋　均氏所蔵	資料番号91	原澤　誼による1814年の書写．12丁．外題なし．内題は「花陵青嚢神秘録」
28. 青嚢秘録	高橋　均氏所蔵	資料番号整理中	外題「春林軒十一種　青嚢秘録」，内題は「青嚢秘録」34丁．書写者，書写年不詳
29. 青嚢秘録	高橋　均氏所蔵	資料番号整理中	外題なし．内題は「青嚢秘録」．27丁．「天刑秘録」と合冊．書写者，書写年不詳
30. 青嚢秘録	高橋　均氏所蔵	資料番号整理中	仮綴じ．外題，内題なし．目次あり．30丁．書写者，書写年不詳
31. 青嚢秘録	高橋　均氏所蔵	資料番号整理中	仮綴じ．外題，内題は「青嚢秘録」．35丁．書写者，書写年不詳
32. 青嚢秘録	京都大学富士川文庫	請求番号 セ/84	仮綴じ．外題，内題は「青嚢秘録」．28丁．書写者不詳，書写年は1843年
33. 青嚢秘録	京都大学富士川文庫	請求番号 セ/85	表紙あり．外題は「青嚢秘録　単：，内題は「青嚢秘録」．34丁．書写者，書写年不詳．
34. 青嚢秘録	京都大学富士川文庫	請求番号 セ/86	外題なし．内題は「青嚢秘録」．36丁．書写者，書写年不詳．
35. 青嚢秘録	京都大学富士川文庫	請求番号 セ/87	外・内題は「青嚢秘録」．目次あり．54丁．疾患別の処方を記述，書写者，書写年不詳．
36. 青嚢秘録	京都大学富士川文庫	請求番号 セ/88	原表紙は仮とじ．外・内題は「青嚢秘録」．38丁．1831年の「早卒」による書写．
37. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	61446	同名異書である．上下2巻．「麻薬」の項なし．疾病毎の処方記載．原典不明．
38. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	44343	同名異書である．「麻薬」の項なし．雑多な処方．原典不明．
39. 青嚢秘録	内藤記念くすり博物館大同文庫	33793	同名異書．外題，内題は「青嚢秘録」．法眼立言著．61丁．「論脉」，「中寒」など記述．

＊：正式には公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋

に「青嚢」の文字を冠したのであろう．なお佐藤持敬の言う「異名同書」は今回の調査では見つからなかった．「異名同書」を意図的に見出すのは甚だ困難である．「青嚢秘録」の場合，著者名を欠く場合が多いので，目録によって探索することは一層困難である．

書写年に関して，現存する最も古い年紀を有する写本は原澤本で書写年は1814年である．ただし原澤の稿本であるとする根拠はない．この写本の識語によって1810年と1811年に書写された2写本の存在が知られるが，いずれも現在所在は知られておらず詳細は不明である．管見では文化年間（1804～1818）の写本は原澤本一本，文政年間（1818～1830）の写本は写本8，9の2本だけであり，書写年代が明らかな写本の多くは1831年（天保2）以降である．このことは「青嚢秘録」が1831年以降に広く書写されて普及したことを強く示唆する．

本書の内容は，各種疾患に用いる処方を順序不同（一部は疾患別，症状別に記述）に列記したものであり，前述したように製薬法のみを記した書でもなければ，各種疾患の治療法を述べた書でもない．宗田がこれを「製薬」の書としたのは，覆刻に用いた大塚本の本文冒頭に「製薬」の二文字があるためであろう．しかし「製薬」の2文字は「目次」にはない．写本35の富士川本では「目次」があり，その冒頭は「製薬」，「麻薬」，「薫薬」で，この順序は大塚本と同じである．つまり同じ系統の写本であることが分かる．このように冒頭の処方だけに注目すれば，「製薬」を記した著述であるとなるが，前述したように大塚本232方中製薬法を述べているのは27方（約11.6%）のみである．したがって本書は製薬法を記した書であるとは言えない．また灸治も6方（その中の1方は「狐ヲヽトス法」）も記されている．大塚本の書写年は知られていないが，1814年の原澤本は46方，原澤本とほぼ前後した頃に書写されたと考えられる早稲田大学本は47方，書写年が知られている写本の中では原澤本に次いで2番目に古い1826年に書写された写本8は154方，1850年になった「二十一種本」は216方（表2）を収めており，一概に云えないが，書写年が新しくなるにつれて処方数が増加する傾向が窺われる．

これまで著者が研究対象とした36本の写本はすべて「序」を欠く．したがって初稿本の編纂者，編纂時期，編纂の経緯も知られていない．青洲が教育上，臨床上の必要性を認めてその編集を指示ないし示唆した可能性を全く否定できないものの，「丸散便覧」[3]，「禁方（拾）録」[15]，「続禁方録」[16]の「序」や「凡例」に示されているような青洲の直接的関与を「青嚢秘録」において実証することは困難である．また「瘍科神書」[17]，「瘍科瑣言」[18]，「青洲医談」[19]は青洲の口述を筆記した記録であり，文中に「先生曰」，「師曰」とあることによって青洲の口述であることが実証されるが，「青嚢秘録」の諸写本の何れにもこのような「先生曰」，「師曰」の語句は認められない．唯一，青洲の言としては，早稲田大学本の「奇効油」（9丁裏）に「此，予カ近来製シ得所ニシテ，其功及形質西洋ニ云所ノハルサムコツハイハニ異ナル事ナシ．シバヽ用テ有効」（句読点－著者）ある．この処方は「原澤本」には見られない．このことを考慮すると，「青嚢秘録」は門人の一人が春林軒で口述の記録や諸種の資料から必要と思われる処方を備忘録的に書き留めたのがその原初の姿であると推測される．ただし，この処方は青洲が創始した処方であるが故に青洲の言葉を痕跡として留めているのであろう．

本書の大きな特徴は「麻薬」つまり全身麻酔薬の処方を収載していることである．原澤本では合計5方の全身麻酔薬が記されているが，最初の処方は「麻沸湯方（青洲先生家方）」である．「麻沸湯」の語は1810年以降の文献に見られるというこれまでの見解と矛盾するものではない．一方，早稲田大学本では「麻沸湯」と「華岡麻沸湯」の2方のみである．時代が降るにつれて処方数が増えると推察されるから，麻薬の処方数のみから考えると，早稲田大学本は原澤本よりも古い形態を伝えているとも言える．以下，書名，現存最古の写本「原澤本」，写本の系統，収載処方内容，全身麻酔薬についての諸事項に関して初期の写本を中心に各論的に検討していきたい．

表 2　「二十一種本」に見られる処方一覧（1）

抜毒散	密陀錠	カラアンス	カラアンカフ	麻沸湯	又方
一方	又方	又方	又方	又方	解醒剤
又方	製生々乳法	ソツビルノ方	製甘汞丸法	甘升汞丹	再製法
三製法	甘汞丸	誤刺血瘤出血不止治方	又方	又方	二丁香丸
毒痘入眼失明者	治労咳方	梅肉円	治喘息方	如聖散	癲癇之奇方
方	又方	坐薬之方	馬脾風之方	又方	癰疽一服
テリヤアカ方	コフラハトロ方	白州散	建珠散	治腹痛久不癒者奇方	神効吹喉散
辰砂散	藜葉散	三十七妙散	薬湯方	治下血奇方	細茶散
治黄胖方	テリヤアカ方	又方	真珠散	蘇合香円	治癲癇五積六聚方
又方	治疒瘡頭痛方	治真頭痛方	消黄丸	油風之奇方	中風七日之内奇方
禹餘糧丸	治五疳方	大赤蛙湯	小赤蛙湯	脾労丸	酒豆散
参連丸	鉄砂丸	癲癇虫下之方	黄霜散	神明丸	ヘレシヒタアート方
治腎嚢風方	二蛇湯	猿頭散	抜疔散	梅消水方	反蛇散
カルシス	鵝掌風薫薬	掌中薫薬	瘧百発百中有効	又方	乳頭裂奇方
又方	縛血散	治驚風方	喉癰含薬	乳岩薫薬	一奇方
礪砂製方	治頭痛妙方	一魚散	治反鼻咬及風犬毒	毒薬ノ烟ヨケノ方	解蕎麦ノ毒方
解蟹之毒方	解竹筍之毒方	解河豚魚之方	治魚硬方	竹木刺治方	山脇先生療反胃法
治反胃方	紫金丹	治鼠犬蝠咬方	金粉散	ヒリヽ方	治頑癬方
白帯下治方	廉（月偏）瘡治方	治遺尿方	治産水腫方	抜歯方	薫薬方
塗麻薬方	又方	吃逆之灸	治眉毛脱落方	荠寧湯	水薬方

表 2　青嚢秘録「二十一種本」に見られる処方一覧（2）

天水丸	キリステイル方	ソツヒル之方	製朱砂方	硫黄油ヲトル方	セツトンノ方
火熨法	羅布免氐	治痿癥方	粒甲丸	畜生毎ニ中タル	反鼻毒ニ鉄砲焔硝
馬ニ喰タルニハ	毒石ヲ焼ク烟リ	治陰嚢偏墜腫方	大同神功散	黄蝋丸	治喘満✖死方
治脚気衝心方	真珠散	緑豆湯	産後耳聾治方	藍葉散	生髪方
治小瘡方	飯命丹	陰風之薬	癲癇奇方	試用丸薬方	煎湯
調理之方	灸法	トメ灸ノ法	調摂之灸法	癲癇之奇方	吹薬方
吃逆灸法	疥癬樒薬	治淋疾甚者	治吐血衄血胸痛者	トケ抜方	白蛇散
大極丸	白丹砂製法	第二製	第三製	第四製	第五製
治淋奇方	治腋臭方	塗麻薬之方	下血塊之方	治霜傷奇方	病犬傷之妙方
治乳腫并嚙乳潰瀾者	頭痛奇方	雀斑奇方	腹蛇酒方	小瘡痕ヲトル方	五応散
火丹治方	嘔吐百薬不効者	蜈蚣傷治方	治シビ毒方	馬咬傷奇方	治婦人上送甚而頭痛
治膈噎方	治赤帯下方	治中風方	治痰方	療湿毒耳聾之方	療瘭疽腫甚者
治痰咳百薬不効者	治重舌及口中一切病方	酒橙餅	トケ抜方	療膈噎神方	遺毒洗薬
治黒斑方	治瘭疽方	陰瘡坐薬	馬咬治方	乳ヲ出方	狐附ヲ治スル方
治黄胖方	慢驚風方	急驚風方	流延膏	海金砂散	血淋良方
消疝散	又方	咬傷解毒散	八味生姜丹	白刀散	養調丹
諸腫物抜用方	治労嗽方	帯下良方	魚目ヲトル方	治膈噎方	治脚気衝心方
漆瘡付薬	久咳治方				（合計 224 方）

✖：不詳（「含」の右に「欠」か，誤字と思われる）この処方は「大塚本」には見えない．

3. 書名「青嚢秘録」について

一般的に「青嚢秘録」という書名に対して重大な誤解があると思われるので言及したい．1の「『青嚢秘録』に関する先行研究」で述べた通り，これまでの青洲研究において書名の問題を含めた本書が詳細に論じられることはなかった．ところが，山田慶児は1990年に「夜鳴く鳥」を著して，その中で「名医の末期」と題して中国古代の名医華佗の事績を詳細に論じ，青洲の「青嚢秘録」書名に関連して次のような一文を書いている．

> 華佗の麻沸散と青洲の麻沸湯のあいだには，麻酔作用以外には何の共通性もない．そのかぎり，青洲と華佗との関係ないし青洲にたいする華佗の影響を医学史家が重視しないとしても，

当然であろう．しかし，知識の伝播と発明にたいする刺激という視点からすれば，華佗への執拗なまでの青洲のこだわりを，たとえば『青嚢秘録』という書名にしても，小説『三国志演義』に登場する華佗の失われた著書，麻酔薬の処方が記載されていたはずの『青嚢書』に由来することを，もっと重視すべきであろう．それは発明における刺激伝播（stimulus diffusion）と呼ばれる現象にほかならぬ.[20]

青洲の「青嚢秘録」の書名の由来に言及した記述であるが，この短い文章の中に不適切な表現，厳しく言えば誤りがいくつも披見される．重要な問題であるので以下にそれらを指摘したい．まず山田は華佗の「麻沸散」と青洲の「麻沸湯」との間に麻酔作用以外に何の関係性も認めないとするが，この解釈は誤りである．外科手術を行う立場から見れば「麻沸散」も「麻沸湯」も手段としての麻酔法に用いる一処方であって目的ではない．しかし，医療という立場から見れば，麻酔法も外科手術も手段に過ぎない．華佗も青洲も無意識，無痛下に手術を行うために麻酔薬を用いた．したがって，両者の間には「麻沸散」と「麻沸湯」の共通性というよりも，全身麻酔下に，つまり無意識で無痛下に円滑に手術を行いたいという目的，つまり共通性があったと見るべきであろう．このことは極めて重要であり看過すべきことではない．この点を非臨床家は看過しがちである．

次に山田は「青洲にたいする華佗の影響を医学史家が重視しないとしても，当然であろう.」と記すが，これも大いなる誤りである．この記述を読めば，日本の医学史研究者は華佗が青洲に与えた影響をこれまで全く無視してきたかのような印象を読者に与えるが，事実はこれと大きく懸隔している．このことは以下に引用する呉　秀三の「華岡青洲先生及其外科」中の記述を一読すれば了解するであろう．

先生（青洲のこと－松木注）ハ古方家トシテ周漢ノ盛時ヲ追想シ，今ノ医学ヲ其昔ニ復サントノ羨望ヲ有シタルモノニシテ，而モソノ険症・難病ニ手ヲ下サントノ多年ノ熱望ハ，華佗等ノ事跡ヲ見其手碗ヲ想ヒナガラ，西洋ノ手術ヲキヽ長崎ノ実情ヲ見テ，之ヲモドカシクモ思ヒ，之ヲ自カラ試ミントシ，更ニ華佗ノ麻酔法ヲ施シナガラ，外科手術ヲ加フルコトノ険難ノ疾病ヲ治療スルニ大功アルベキニ見到シ，大ニ心力ヲ傾注サレシナラン.[21]（句読点－松木）

呉の以後の青洲の研究者は，青洲が華佗の影響を受けたことを暗黙に了解しているのであり，余りにも自明のことであるので敢えて言及しないのである．このことをもって日本の医史研究者が青洲に対する華佗の影響を無視して来たとまでは言えない．

次に山田は「華佗への執拗なまでの青洲のこだわり」があったと記している．山田がどのような事実を根拠にこのように主張するのか不明であるが，青洲が華佗の名をその著述中に記すのは，管見では唯一ヵ所「乳巖治験録」中だけである．このわずか一つの記述のみで「華佗への執拗なまでのこだわり」と評するのは適切ではない．青洲が華佗に対して強い憧憬の念を抱いていたことは間違いないであろう．強い憧憬の念を抱いていたからこそ長年を費やして開発した全身麻酔薬の名称を華佗の「麻沸散」に因んで同名の「麻沸散」としたのである．「麻沸湯」は後の名称であり，当初は「麻沸散」の呼称であったことは「乳巖治験録」にこの名称が披見されることで明らかである．山田は「麻沸散」と「麻沸湯」の違いを理解していない．「執拗なまでのこだわり」と「強い憧憬の念」は全く異質なものである．青洲が「こだわった」対象は「麻沸散」の開発であって華佗ではない．

小説『三国志演義』を引用して「青嚢書」を論ずる山田の態度にも納得できない．華佗の伝を記した原典である「三国志　方技伝第二十九　魏書華佗傳」には「佗臨死出一巻書與獄吏曰此可以活人吏畏法不受佗亦不彊索火焼之」[22]とあり，また「後漢書　列伝七十二下　華佗」にも「佗臨死出一巻書與獄吏曰此可以活人吏畏法不敢受佗不強索火焼之」[23]と殆んど同文を載せるのみで，ここに

は「一巻書」とあって「青嚢書」なる名称は全く出てこない．つまり「青嚢書」は後人の作である．後代の「後漢書，列伝七十二下　華佗」の補注に，華佗の獄吏呉押獄に対する言葉として「我死二非命一，有二青嚢一レ未傳，二子不レ能レ継レ業」[24] とあり，「晋書」の「郭璞傳」には「五行天文卜筮」の書として「青嚢中書」の語が披見される[25]．以上の記述からすれば，「青嚢書」は華佗に直結する固有名詞ではなくして一般に方技の書，医書と解すべきであろう．

山田は青洲の著述「青嚢秘録」が「青嚢書に由来することをもっと重視すべきであろう．」と主張する．この記述も不適切である．有持桂里編の刊本「青嚢秘録」は症状ごとに分類した処方集であるが，青洲の「青嚢秘録」とは全くの「同名異書」である[26]．その中に華佗の影響を微塵も認めることは出来ない．上述したように「青嚢」は何も華佗だけに結び付く固有名詞ではなく，一般的に印を入れる嚢，薬嚢を意味し，「晋」以降は「方技」，後世には「医術」を意味するようになった[24]．したがって「青嚢書」は「医書」，「医学書」の意である．「青嚢」を冠する日本の医書は何も青洲の「青嚢秘録」に限らない．片倉元周の「青嚢瑣探」が一般に知られているし，書名だけであれば伊沢信括の「青嚢括要」がある．訳本であるが江馬天江訳の「青嚢珍味」もある[26]．山田の主張を容れるとすれば，これらの著書にも華佗の影響を認めなければならない．これらを見ても山田の主張が正鵠を得ていないことは明らかである．

青洲の著（撰）とされる「青嚢秘録」については，「麻薬」との関連から推察して華佗との関連を全面的に否定する訳に行かないが，このことのみで「青嚢秘録」の書名が直ちに華佗の「青嚢書」に由来するとは言えない．青洲が「青嚢秘録」の書名の命名者であれば話は別であるが，それを実証する証拠がないし，青洲が自身の撰した著述を「○○神秘録」，「○○秘録」と称することはあり得ないからである．いずれにせよ，青洲の「青嚢秘録」の書名と華佗の「青嚢書」を直接的に結び付けて考えることは適切ではない．

4. 現存する最も古い写本「原澤本」とそれに関連する早稲田大学本について

現時点で最も古い年紀を有する原澤　誼による書写本（表1の写本27）について詳しく記したい．この写本は高橋コレクションの中の一冊である[27]．仮綴じで全29丁．無辺無界で半丁に10行記されている．仮表紙は白紙である．内題は「花陵青嚢神秘録」で，1丁表から11丁表までが「花陵青嚢神秘録」であり，11丁裏は白紙である．12丁表から28丁裏までが安田孝平による「青洲先生治験録」である．29丁表に「青嚢秘録　青洲治験　終」とある．つまりこの写本は「花陵青嚢神秘録」と「青洲先生治験録」の合冊である．両者の書体は近似している．末題に「青嚢秘録」とあることから「花陵青嚢神秘録」は「青嚢秘録」の外題を有していたことも推察される．安田の「青洲先生治験録」は「近世漢方医学書集成29」に収載された「青洲先生治験録」[28] と比較すると殆んど同文である．「青洲先生治験録」[28] はその中に「乳岩三発之證」の項を含んでいる．これは1830年（文政13）3月2日に乳癌の手術を受けた松原定碩の妻[29] の記録であるから，「青洲先生治験録」はこれ以降に成立したものである．したがって，この写本は1830年3月2日以降に原澤の「花陵青嚢神秘録」と安田の「青洲先生治験録」が書写されて一本とされたことがわかる．原澤の筆跡が知られていないので，「花陵青嚢神秘録」が原澤自身による稿本であるかどうかは明確ではない．以下，この写本の前半に含まれる原澤の「花陵青嚢神秘録」を「原澤本」として論を進めたい．なお原澤には「東都原澤文中翁整骨法図説」（6丁，11図）が「青洲先生活術図説」などと合冊されて京都大学附属図書館富士川文庫（デジタルアーカイブ）に所蔵されているが，これは呉の云う「華岡家整骨竝巻毛綿図巻」[30] と共通しており，原図を原澤が少し改変して描いたものである．もちろん原澤自身の手になるものではなく書写年も知られていない．したがって，この写本は原澤本の成立に関して何ら有益な情報を与えるものではない．さらに原澤は大田錦城の「梧窓漫

筆」の後編（続篇）に「梧窓漫筆続篇序」を寄せて，その中で彼の修学歴を披露しているが，「青嚢秘録」の成立に関しては何ら資するものではない[31]．

原澤本の一丁表の内題の次に原澤　誼の書写識語が5行に渉って次のように記されている．この識語は「青嚢秘録」に成立に関して甚だ重要な内容を含んでいる．

> 昔時，午歳写する本，誤多く且つ法方少なし．今，久米氏所訂の本を以って之を補う．時に文化十有一年甲戌歳四月，南紀平山の客舎南窓下において写す．上毛原澤　誼（原漢文，句読点－松木）

「上毛」の「原澤　誼」は「華岡青洲先生春林軒門人録」[32]に見える武蔵の国からの入門者「文化十一年二月二十五日　江戸亀井町　原澤　文中」と見て差し支えないであろう．梶谷の編になる門人録では，入門年，姓名は同じであるが，住所は「江戸亀井町上野上野田村産」となっている[33]．当時，入門者は入門して比較的早期に青洲の著述の書写を始めたようであるから，原澤の入門期日「文化十一年二月二十五日」と書写の時期「文化十有一年甲戌歳四月」は時期的に見て何ら不都合の点はなく整合性がとれている．原澤が南紀平山の客舎でこれを書写していることはこの写本の由来の正統性を示すものである．

原澤の書写識語は書名に関しても重要な示唆を与える．原澤本の原外題は知られていないが，前述したように写本の末尾に「青嚢秘録　青洲治験終」とあることを考慮すれば，外題が「青嚢秘録」であったことが示唆される．内題はしばしば古い題名を伝えていることからすれば，「青嚢秘録」は古くは「花陵青嚢神秘録」，つまり「華岡青嚢神秘録」と称されたことが示唆される．青洲が自撰の著述に「神秘録」なる名称を付けることは考えられないから，「花陵青嚢神秘録」の題名は門人の命名である．書写が繰り返される過程で，冒頭の「花陵」つまり「華岡」は春林軒の門人たちにとっては自明のこととして省略され，さらに5字の「青嚢神秘録」も読みやすさ，呼び易さの点から「神」の一字が省かれて4字の「青嚢秘録」となった可能性も否定できない．青洲の著述には「丸散便覧」，「禁方（拾）録」，「瘍科神書」，「瘍科瑣言」，「産科瑣言」，「青洲医談」など4字の書名が多いことも参考になろう．原澤自身が原澤本を書写したならば内題と末題は同じでなければならない．このことからも原澤本は彼の稿本である可能性は低いとするのが妥当であろう．

原澤の識語に「午歳写する本」（以下「午歳本」）とあるが，1814年（文化11年甲戌）から遡って最初の「午」の年は1810年（文化7庚午），さらに遡ると1798年（寛政10戊午）になる．原澤本の中に全身麻酔薬として「麻沸湯方」の語が見られるが，「麻沸湯」の呼称の出現は，著者の研究によれば1810年以降であり，それ以前に遡ることはない[34]．したがってこのことを考慮すれば，「午歳」が1810年を指すと考えるのが妥当であろう．

「午歳写する本」とあるが，「書」や「稿」でなく「写」とあることを重視すれば，午歳本はいわゆる写本と考えられる．原澤によれば，午歳本は誤りが多く，記載している処方数も少なかったので久米氏の所訂する一本（以下「久米本」，書写年は不明）に準拠して補訂したという．「所訂」とあるから久米本も稿本ではなくして，初稿本ないしその写本に手を加えて作られた一本であったことになる．現在のところ，午歳本も久米本もその所在は知られていない．原澤は久米本を借覧（原澤が久米から直接借覧したとは限らない）して午歳本を補訂して一本を作ったのであるから，久米は原澤以前の春林軒入門者と推測される．門人録によれば，これに該当する久米姓の人物は「久米純臺　江州彦根　文化8年（1811）8月17日」一人である[35]．久米が午歳本とは異なる系統の写本を入手し，それを補訂した一本を作ったことが知られる．久米の入門時期から推測して，彼が書写して写本を作ったのは1811年の後半と推定されるが，午歳本と久米本の原本とのどちらがより古い写本であるは俄には判断がつかない．しかし両者共に「青嚢秘録」の原初の姿に近いものが

表 3　原澤本と早稲田大学本に収載された処方（頭の番号は著者による）

原澤本：
1　労咳良方　2　帯下良方　3　魚ノ目トル方　4　嗝噎　5　白蛇散　6　黄蝋丸　7　漆瘡
8　山脇先生療反胃法方　9　抜毒散　10　ソツヒルノ方　11　癰疽一服　12　ゴフラハトロ
13　禹餘糧丸　14　下血塊之術　15　治瘀咳百薬不効者　16　養調丹　17　治脚気衝心方　18　五宝丹
19　黴毒薫薬　20　舌疽薫薬　21　抜毒散　22　密陀錠　23　賀羅堊年須　24　治血出不止方
25　坐薬方　26　秘伝丸　27　虎肉鷓鴣菜湯　28　飛里里　29　ソツヒル　30　甘汞丸　31　天水丸
32　水薬　33　治遺尿方　34　治労咳方　35　丸薬方　36　治癪風　37　麻沸湯方　38　又方
39　又方　40　又方　41　又方　42　塗麻薬方　43　又方　44　乳岩薫薬　45　痔油　46　縛血散

早稲田大学本：
1　抜毒散　2　密陀散　3　カラカンス　4　カラアンコ　5　製生々乳方　6　ソツヒル
7　製甘汞丸法　8　製甘升永丹方　9　再製法　10　三製法　11　甘永丹　12　セツトンノ方
13　鶩掌風蒸薬　14　鉄丸膏　15　又方　16　四味散　17　麻沸湯　18　華岡麻沸湯
19　誤刺血瘤出血不止者治方　20　又方*　21　又方*　22　薫薬方**　23　鉛ヲ末ニスル方**
24　羅布兎氏　25　舌疽薫薬　26　吉雄家塗麻薬方　27　粒甲丹　28　山脇先生療反胃法方
29　誤テ血瘤ノ類 破針シテ出血不止者　30　蝸牛油取法　31　蚯蚓油取法　32　鶏肉丸　33　水薬方
34　天水丸　35　濯酢法　36　止血散　37　奇効油　38　収斂散　39　保元湯
40　耳聾ノ治不治を弁スル　41　治口中諸出血　42　紅花散瘀湯　43　抜毒丸***　44　瘰癧擦薬
45　悪瘡洗薬　46　楊栢散　47　武羅牟登

*：これらの処方は原澤本では「24　治血出不止方」中に含まれている．**：この 2 方は原澤本では「19　黴毒薫薬」に相当する．***：「1　抜毒散」の処方とは全く異なる．　：両本に共通する処方

あったと推測される．大約において両者が同系統の写本であったことは，原澤の「久米氏所訂の本を以って之を補う．」の文言によって窺われる．大きく異なった系統の写本であれば「補」だけでは済まされなく，「改」，「改訂」の字句が用いられてしかるべきである．「補」の字からは午歳本の収載処方数が少なかったので，久米本によって午歳本に不足している処方を補充したに留まり，書名を改めるなどの大きな変更はなかったことが示唆されるからである．なおかつ，原澤は午歳本を正当な写本と認めていたことも知られる．久米本が正統であれば久米本を書写して，その不足を午歳本で補えば済むはずである．しかし，実際には午歳本を書写してその不足を久米本で補ったことは，原澤が午歳本を正統と考えていたことを示唆している．

原澤本は午歳本を久米本で補った写本であるが，収載された 46 方の処方を詳細に検討すると，久米本によって補われた痕跡を見出すことが可能である．原澤本に記載された処方を表 3 の上段に示した．冒頭から「労咳良法」，「帯下良法」，「魚ノ目トル方」とあって，9 番目に「抜毒散」がある．しかし 21 番目に同名の処方「抜毒散」が再出する．用量，用法は近似しているが，同じではない．ほぼ同じ内容の処方でありながら 9 番目の「抜毒散」の次に 10 番目として 21 番目の処方を「又方」と記入していない．数百方を収載した処方集ならいざ知らず，わずか 40 数方の処方集において同名の処方を繰り返して異なる丁に記述する理由はない．何か特別な理由があったと見るべきであろう．著者は 21 番目の「抜毒散」以降の何方かの処方が久米本によって追加された処方であると推測する．このように考えると午歳本は約 20～30 方を収載した写本となり，原澤の識語にある「法方少なし」と合致する．この推測が正しいとすれば，午歳本が「青嚢秘録」の初稿本の姿に極めて近いと見ても事実と懸隔すること甚だしくはないと考える．

すべての処方とは限らないが，21 番目の「抜毒散」以降の何方かの処方を久米本からの追加と考えるもう一つの理由，これはさらに有力な根拠であるが，21 番目からの 3 処方は「抜毒散」，「密陀錠」，「賀羅堊年須」（用法を読むと「カラアンス」の意であるが，誤字である．）である．これらの 3 処方とそれらの順序は，後述する写本 7 の早稲田大学本の冒頭の 3 処方である．早稲田大学本のみならず，例えば写本 32～36 の 5 本の富士川本ではいずれも冒頭が上記の 3 方から始まっている．これを見ても分かるように「抜毒散」から始まる写本は一つの系統を作っていたと思われ，久米本がそのような系統の古い写本の一つであった蓋然性は高いと見るべきであろう．

これを傍証する写本がある．写本10である．これは1867年（慶応3）に森　約之が矢島優善（渋江抽斎の次子）から借用して書写した一冊本で，「巻之乾」（14丁，最初の4丁は約之の自筆）と「巻之坤」（13丁）からなる．「巻之乾」の最初の7丁は27方の処方が記され，後半の7丁は「嬴洲先生吐法例口訣」である．「巻之坤」には59方の処方が列記されている．乾坤の処方は同一の写本が分断されたものではなくして，別々の写本から書写ないし抄出されたと考えられる．「巻之乾」の27方は「製抜毒散法」，「製密陀錠法」，「製生々乳法」の順序となっており，処方内容とそれらの順序は早稲田大学本の処方に近似している．処方内容，処方数から推測して，「巻之乾」の処方を収載した7丁は，前述した午歳本，ないし久米本の形態を伝えているとも考えられる．少なくとも20数方を記した写本が存在した一証左にはなろう．いずれにせよ，原澤の識語によって「青嚢秘録」は少なくとも1810年までには成立していたことが知られる．しかし，その初稿本の編者または筆録者が誰であるか，その正確な題名，成立年については依然として不詳である．

次に原澤本の内容について論じたい．記述は，処方名，生薬名，用量，用法の順序でなされ，この記述形式は「禁方拾録」[4]，「春林軒丸散方」[36]などの類書と異なる所はない．処方の配列は疾患別，症状別になっておらず，手当たり次第に書き込まれたと思われる．表3の上欄を見ても分かるように，見出し（項目）もなく病（症状）名，処方名が互いに何の脈絡もなく列記されている．疾患別に系統的に配列した処方ではないことがわかる．それらの中には内用薬ばかりではなく，「黴毒薫薬」，「坐薬」，「塗麻薬方」などの外用薬も含まれる．全身麻酔薬については「麻沸湯方」以下5方を記述しているが，このことについては後述する．以上のことから原澤本は午歳本＋久米本であり，午歳本の処方数は20～30方前後と推定され，原澤本の46方よりはるかに少なかったことが推定される．そして久米本の処方数も46方以上ではなかったことも分かる．注目すべき点として37番目の「麻沸湯方」の下に「青洲先生家方」とあり，最後の46番目の「縛血散」の下に「青洲先生秘方」と注してある．処方名の注に「青洲」の名が見えるのは原澤本ではこの2ヵ所だけであり，これらが青洲の創始になる処方であることを示している．

写本の題名ないし著者名に「花陵」の二字を用いている写本は原澤本以外では，唯一早稲田大学本のみである．この「花陵」の二文字は原澤本との何かしらの関連を示唆する．早稲田大学本は書写者，書写年代は明らかでないものの丁寧に書写された写本で，染み，虫食いが酷く，表紙，紙質の状態から考えて古い写本と考えられ，少なくとも最幕末期の写本でない．無辺無界で，半丁に10行記述されている．題箋に「青嚢秘録　全」とあり，内題も「青嚢秘録」である．全43丁であり，1丁表から11丁裏までが「青嚢秘録」で，12丁表から32丁裏までが「春林軒丸散方記」，33丁表から42丁裏までが「春林軒膏方便覧抜粋」，43丁表から43丁裏までが「毒蛇毒幷猛獣ノ近付サル良方」である．全体を通して書体は同一人によると思われる．この合冊に含まれている「青嚢秘録」の11丁を以下「早稲田大学本」とする．

早稲田大学本には「青洲花陵先生著」とある．本文は原澤本と同じく，処方名，生薬名，用量，用法の順序で記述され，処方の配列も見出し，つまり項目がなく，疾患別，症状別に編集されておらず，任意に書き込まれたと思われる．計47方が収載されている．処方数全体としては原澤本の46方に近似している．早稲田大学本の処方をすべて記述の順番に列記すると表3の下段に示したようになる．ここでは，両写本に共通する処方15方について網掛けを施している．処方名が多少異なっても生薬名，用量，用法がほぼ同じであれば共通であるとした．全身麻酔薬を2方のみ記述しているが，その内容については後述する．

原澤本と早稲田大学本との関係は，「華岡」を「花陵」と表記していること，収載処方数がほぼ同数であるの2点である．原澤本中の久米本による追加を「抜毒散」，「密陀錠」，「賀羅亜年須」以下の処方と推定したが，表3下段に示したように早稲田大学本の冒頭はこれらの3方で始まってお

り，このことから早稲田大学本と久米本の類似性が示唆される．しかし，原澤本の久米本による追加処方，最大に見積もれば第21方以下の何方かとしたが，これらと早稲田大学本の冒頭の26方との間に共通する処方が少なく，早稲田大学本と久米本は多少異なった系統の写本であったことが窺われる．このことを傍証する証拠がある．早稲田本では全身麻酔薬の処方は「麻沸湯」，「華岡麻沸湯」の2方のみであるが，原澤本では「麻沸湯方」，「又方」以下計5方を記載している．「又方」は同種の処方を他書によって追加した可能性を示している．午歳本に記載されていた全身麻酔薬の処方数は知られないが，原澤本では，全身麻酔薬の処方5方すべてを久米本によって補ったか，あるいは「麻沸湯方」以下の4方を補ったか，3方を補ったかのいずれかであろう．全身麻酔薬の処方数から考えれば，早稲田大学本は原澤本よりも古い形態を供えていることは間違いない．この推察は局所麻酔薬の処方「塗麻薬方」によっても補強される．早稲田大学本では局所麻酔薬の処方は「(26) 吉雄家塗麻薬方」1方のみである．ところが原澤本では「(42) 塗麻薬」(用量，用法共に「吉雄家塗麻薬方」と同じ) と「(43) 又方」の2方である．「(43) 又方」には「尾張入江又平衛之一子相伝」とある．これは午歳本に「(42) 塗麻薬」のみ記述されていたが，「(43) 又方」を久米本によって追加したか，あるはまた原澤本に欠如していたこれらの2方を久米本によって追加したかのいずれかであろう．このように局所麻酔薬の処方数によっても，早稲田大学本は原澤本よりも古い形態の写本であることが明らかである．何れにせよ，原澤本と早稲田大学本は共に46方，47方と処方数が少なく，処方数全体から見れば共に初稿本の「青嚢秘録」に近い形態を備えていると思われる．

5.「青嚢秘録」の収載処方数と書写回数について

書写される度に10%の処方が追加されるとすれば，50方を記す写本が，例えば二十一種本や大塚本のように230方（50方の4.6倍）前後の処方を収載するまでには16回（$50\times1.1^{16}=50\times4.59$）の書写が必要であるが，その割合を20%にすれば8回の書写で処方数は215方（50×1.2^{8}）に達し，30%にすれば6回の書写で241方（50×1.3^{6}）となる．1810年代から1850年代末までの約半世紀の間に10回近い書写が繰り返されたとしてもあり得ないことではない．

しかし，写本1の二十一種本は216方，写本2の大塚本は232方を収め，写本6の滋賀大学河村文庫本は211方，写本8～20までの内藤記念くすり博物館大同文庫所蔵の諸本は殆んどが154～220方を収載し，写本21の神戸大学砂地本は232方，原澤本を除く高橋　均氏所蔵の写本28～31の処方数は各222，244，229，239であり，写本32～36の富士川本はいずれも収載処方数がそれぞれ226，238，228，249，194で200方前後である．一方，原澤本，早稲田大学本はわずか46方，47方を収載している．このように現実に50方弱の処方を収載した写本が実在する一方で，写本35のように249方を記した写本も存在する．例えば書写時の増加率を大きく見積もって30%とすると，1回の書写では65方（50×1.3），2回の書写では85方（50×1.3^{2}），3回の書写では110方，4回の書写では143方，そして6回書写では241方となる．上記したように250方前後の処方を収載する写本は存在するが，65方～143方を記載した写本は今回調査した36本の中には見出されない．このことは処方数が徐々に増加したのではなくして，少数回の書写によって幾何級数的に増加したことが推測される．このようなことを考慮すると，200方前後の処方数の写本は書写が繰り返された結果出来上がった写本であると考えられる．したがってこれらの写本は初期の「青嚢秘録」の成立を考える上では余り重要ではない．処方の記述順序も区々であり，これを以って写本の系統を云々することも控えなければならない．「はじめに」の後半で述べたように玄調は「青嚢秘録」を評価して「二十一種」の第九集としたが，その底本は216方の処方を収めている．これを底本とした理由は分からないが，1850年頃にはほとんどの写本が200方前後の処方を収載したものであ

り，それらの中で適切な写本を玄調が選択したのであろう．

青洲の他の著述，たとえば「瘍科神書」[17]，「瘍科瑣言」[18]，「青洲医談」[19] などの場合，ある期間の口述の筆記が核となって原初の著述ができ，その後の口述記録がそれに付加されて次第に内容が充実増加していった経緯が窺われる．本書においても同様なことが推測されることは前述した原澤本に見られる識語によって明らかである．いずれにせよ，当初は収載する処方数も少なかったことは間違いないが，ある時点で多数の処方が一気に追加収載されて，例えば二十一種本，大塚本，さらには富士川本に見られるように200方以上に達したと推察すべきであろう．しかし，何を契機として急激に処方数が増加したのか，そしてそれが正確にいつのことであったについては不詳としか言いようがない．

6.「青嚢秘録」に記載された全身麻酔薬について ――「麻薬考」,「続禁方録」との関係――

「青嚢秘録」の二十一種本と大塚本に収載された全身麻酔薬を表4に示した．両写本の全身麻酔薬を比較すると，最も大きな違いは前者では7方，後者では6方を収載していること，また前者では主成分である曼陀羅華を「曼」と記述しているのに反して，後者では「風茄」と記述していることである．

先ず生薬の名称から論ずると，華岡青洲関係の写本で「風茄（子）」の語がいつから使用され始めたかは必ずしも明らかにされていないが，原澤本では「曼」と「蔓」，早稲田大学本では「蔓陀羅実」とあることから考えると，「曼（蔓）」の字が初期の写本で用いられたと思われ，書写が繰り返されてある時点から「風（茄子）」とする写本も現れるようになったと推察される．本稿で調査した36本の内，全身麻酔薬を収載している33本の写本では「曼」（「蔓」）の字を用いているのは13本，「風（茄子）」の字を用いている写本は20本であった．このことからも写本は2大系統に分類することが可能である．しかし，書写年が明らかでない写本が多いので，これ以上の系統的な分類は困難である．

次に処方名は二十一種本では「麻沸湯」,「又方」,「一方」,「又方」,「又方」,「又方」,「又方」の7方であるが[37]，大塚本では「麻沸湯」,「花岡麻沸湯」,「又方」,「又方」,「又方」,「又方」の6方である[38]．多くの写本では最初の2方が「麻沸湯（散）」,「花（華）岡麻沸湯」となっている．この2方以下の処方は大抵「又方」である．

33本に記された全身麻酔薬をすべて列記すると複雑になるので，一目でわかるように表記し

表4　「青嚢秘録」の「二十一種本」および「大塚本」に現れた麻酔薬の処方＊

写本名＊	処方名	蔓陀羅実	風茄子	烏頭	川烏頭	草烏頭	白芷	当帰	川芎	天南星	白躑躅	反鼻	鳩糞	猪牙皂莢	小茴香	木鼈子	木香	白朮	白蛇
1#	麻沸湯（A）##	6銭		1銭			1銭	3銭	6銭	1銭									
	又方（B）	6銭		3銭			1銭	3銭	3銭	1銭									
	一方（C）	6銭		3銭			3銭	3銭	3銭	3銭									
	又方（D）	2銭				1銭			1銭		1銭							1銭	
	又方（E）	大										中	中						
	又方（F）	5銭			1銭	1銭		10銭	10銭	5銭				10銭	10銭	10銭	3銭		
	又方（G）	1銭																	5分
2	麻沸湯		4銭	2銭			1銭	3銭	3銭	1銭									
	花岡麻沸湯		6銭	3銭			3銭	3銭	3銭	3銭									
	又方		6銭	3銭			3銭	3銭		3銭									
	又方		2銭			1銭	1銭	1銭	1銭（重複）		1銭								
	又方		大									中	中						
	又方		5銭	1銭		1銭		10銭	10銭	1銭				10銭	10銭	10銭	3銭		

＊：写本によって生薬名の表記は区々である．例えば「曼陀羅（実）」は「蔓陀羅実」,「蔓陀羅」,「蔓陀」,「蔓実」など，「風茄子」は「風茄」,「茄子」など，「川烏頭」は「川烏」,「草烏頭」は「草烏」,「天南星」は「天」,「南星」,「鳩糞」は「鳩屎」,「鳩尿」などと記されているが，表の上覧に示した生薬名と同じと見做して，その欄に記入した．

#：写本名欄の番号は表1の写本名の番号である．

##：アルファベットは表5のために便宜上付けたものである．

表5　「青嚢秘録」各写本に見られる麻酔薬の処方の比較（1）

処方名＊	写本番号＊＊																		
	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
麻沸湯#	A	A’	A’	A’	A’,A’	A’	A	A’	A’	A’	A’	欠	A’,A’	A’	A’	A’	A	A	A’
又方	B	B’	B’	B’	B’	B’	B	B’	B’	B’	B’	欠	B’	B	B’	B’	B	B	B
一方	C	C_1	C	C	C,	C	欠	C	C	C	C	C	$C”_1$	C	C	C	C	C	C
又方	D	$D”^2_1$	$D”^1_1$	$D”^1_1$	$D”^1_1$	$D”^2_1$	欠	$D”^1_1$	D	$D”^1_1$	$D”^1_1$	$D”^1_1$	$D”^2_2$	$D”^1_2$	$D”^2_2$	$D”^2_2$	$D”^1_1$	$D”^1_1$	$D”^1_1$
又方	E	E	E	E	E	E	欠	E	欠	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E
又方	F	F’	F	F	F’	F	欠	F	F’	F	F	F’,F’	F	$F”_1$	F	F	F	F	F
又方	G	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠

＊：「二十一種本」に記載されている麻酔薬7方を基準とした．
＊＊：表1の写本名の前に記されている番号である．
#：基準となる「二十一種本」の処方と比較して，生薬数は同じであるが，用量だけが異なる場合はA’，生薬数が異なる場合はA”とし，一味増加の場合は$A”^1$，一味減の場合は$A”_1$と表記した．
2味加，1味減の場合は$A”^2_1$とした．$A”^2_1$の場合，全体として一味増加していることが直ぐに分かる．
A’,A’：同じ生薬で用量が異なる処方は記述されている．F’,F’も同じ．

表5　「青嚢秘録」各写本に見られる麻酔薬の処方の比較（2）

処方名＊	写本番号＊＊													
	21	23	24	25	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
麻沸湯#	A’	A’	A’	A’	A’	A	A’	A’	A’	A’	A’	A’	A’	A
又方	$B”_1$	B	B	B	欠	B	B	B	B	B	B	B	B’	B
一方	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C,C	C
又方	$D”^3_1$	$D”^2_2$	$D”^3_2$	$D”^1_1$	D	D	$D”^1_1$	$D”^1_1$	$D”^1_1$	D	$D”^1_1$	$D”^1_1$	$D”^1_1$	D
又方	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E	E
又方	F	F	F’	F	$F”_1$	F	F’	F	F’	F	F	F	$F”^1_1$	F
又方	欠	欠	欠	欠	欠	G	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠

＊：「二十一種本」に記載されている麻酔薬7方を基準とした．
＊＊：表1の写本名の前に記されている番号である．
#：基準となる「二十一種本」の処方と比較して，生薬数は同じであるが，用量だけが異なる場合はA’，生薬数が異なる場合はA”とし，一味増加の場合は$A”^1$，一味減の場合は$A”_1$と表記した．
2味加，1味減の場合は$A”^2_1$とした．$A”^2_1$の場合，全体として一味増加していることが直ぐに分かる．
A’,A’：同じ生薬で用量が異なる処方は記述されている．F’,F’も同じ．

た．二十一種本の7つの処方をA～Gとし，この記号を用いて表記したのが表5である．一見して「青嚢秘録」の全身麻酔薬はA～Fが基本になっており，Gは二十一種本と写本28のみに披見される特異的処方であることが分かる．このほかに写本10は最も特異的であるので詳しくは後述する．処方数が47方と少ないことから初期の写本と推察される早稲田大学本はわずか2方だけを収載している．このことは，初稿本の写本では全身麻酔薬2方のみを収めていたことが推測される．その後に全身麻酔薬が追加されたので「又方」，「又方」と記載されたのであろう．

A～Cは6味の生薬からなる処方で用量だけが異なっている．異なる用量の理由は即断し難いが，第一には書写時の誤記，第二には異なる門人によって試行錯誤的に処方が改変された可能性があろう．いずれも青洲一門で使用されていた麻沸散（湯）である．これらは「麻薬考」の松木本には見えないが，富士川本に披見される「紀州花岡氏方」と同じである[39,40]．DはA～Cの処方から烏頭，白芷，当皈，天南星を去り，草烏，白蹶蹶，白朮を加えた処方である．この処方は松木本，富士川本には見えない．Eは曼陀羅華，反鼻，鳩糞（屎）の3味からなるが，松木本の「岩永氏門人方」，すなわち曼陀羅華，露蜂房，反鼻，鳩屎や富士川本の「一方（中神氏用此方）」の曼陀羅華，

露蜂房，反鼻，鳩屎から露蜂房一味を減じた処方である．Fは曼陀羅華，川烏頭，草烏頭など10味からなるが，「麻薬考」の松木本，富士川本の原方（花井氏伝）から草烏頭を減じ，白芷を加えた処方である．また同じく松木本，富士川本の「又方」（大西氏伝）11味から白芷一味を減じた処方である．基本的には，花井氏伝方や大西氏伝方に極めて近いと見做して差支えがない．Gは前述したように，二十一種本と写本28のみに認められる処方である．この処方は松木本には収載されていないが，富士川本には1810年に出版された各務文献の「整骨新書」中に披見される「麻睡散」とある[41]．以上のことから，二十一種本の麻酔薬の記述は「麻薬考」の富士川本から若干の影響を受けていることは否定できない．

青洲の生前に編纂された処方集の中で全身麻酔薬を収載しているのは「青嚢秘録」以外では「麻薬考」[39,40]，「続禁方録」だけで[42]，1791年に編集された「禁方（拾）録」には一方も収められてはいない[43]．「続禁方録」[42]には計7方の麻酔薬が披見されるが，この内2方は塗布薬で，以下に示す残りの5方が全身麻酔薬である．最初に処方名，括弧内に処方内容（用量省略）を示す．

美爾煎　即麻薬（蔓タラゲ，反鼻，鳩糞）
麻薬（烏頭，鬼馬草，白芷，白姜蚕）
麻沸湯（蔓タラケ，露蜂房，鳩屎，反鼻）
又方（蔓タラケ，反鼻，露蜂房）
岩永麻沸湯（蔓タラゲ，鳩糞）

上に示した5方の中で，第2番目の処方を除く4方は基本的には同じ処方と見做して差し支えない．麻酔の薬効を有する生薬としては烏頭を含まず，曼陀羅華一味だけを含むからである．「美爾煎」はオランダ語bilsenkruidの前半の音写でマンダラゲ類を意味する．つまりいずれもオランダ系統の処方である．必ずしも人物を特定できないが，オランダ外科を標榜したと思われる岩永氏の名を冠した「岩永麻沸湯」の呼称はこの処方がオランダ系統であることを示唆している．第二番目に示した「麻薬」は麻酔薬の生薬としては烏頭のみで，青洲の開発した麻沸散（湯）の処方中の主たる生薬である曼陀羅華を含んでいない異質の処方である．これまで著者が閲覧して来た諸種の写本には，この処方は披見されない．したがって「続禁方録」には肝心の華岡流の麻酔薬の処方が一方も含まれていないことは注目される．二十一種本中，この「美爾煎」系統の処方を求めればEに示した処方（曼陀羅華，反鼻，鳩糞）一方のみである．このことから，「青嚢秘録」の麻酔薬は主として曼陀羅華，烏頭を麻酔成分とする中国系の処方であったので，「青嚢秘録」より後に編集された「続禁方録」では逆に曼陀羅華のみを麻酔成分とするオランダ系の全身麻酔薬の処方を主に収載したと言えよう．

写本10は麻酔薬に関しては極めて特異的な処方を収載している．表6に一括して示した．都合11方が記述されているが，マンダラゲを「曼（陀羅華）」と表記されるグループ5方と「接与木」と表記した6方に大別される．両グループの処方の生薬は大きく異なるので，上下に分けて記した．これは，それぞれ異なった写本から抄出したものと推察される．「曼（陀羅華）」のグループは表5の（1）に示したように他の写本の全身麻酔薬と同様であるが，「接与木」のグループは全く異質である．著者はこれまで多くの青洲関係の写本を読んできたが，「曼陀羅華」を「接与木」と記述する史料は極めて乏しく，その原出典も不明である．ただし，春林軒の門人曽根玄達が1815年に記録した「春林軒留塾奇方集」には「麻佛湯　接輿六銭　烏頭　川芎　白芷　当皈各三銭　南星一銭」とある[44]．「接輿」は「接與」の誤記ではないかと思われるが，いずれにせよ曼陀羅華を「接与」，「接与木」と称したことが知られるが，詳細については後日を期したい．

7. 結　論

青洲は非伝統的処方，つまりいわゆる奇（禁）方をも適切に使いこなすことが諸種の疾患の治療上不可欠と考えて奇（禁）方の収集に努めた．処方集の一つ「青嚢秘録」は本間玄調によって1850年に編纂された「二十一種」にも収載され

表 6　内藤記念くすり博物館所蔵の「青嚢秘録」一写本（慶應三年書写）に現れた麻酔薬の処方

処方名	蔓陀羅（実）	風茄（子）	烏頭	川烏（頭）	草烏（頭）	白芷	当帰	川芎	（天）南星	白躑躅	反鼻	鳩糞	猪牙皂莢	小茴香	木鼈子	木香	白朮
麻沸散方	6 銭		20 銭			2 銭	3 銭	3 銭	1 銭								
花岡麻沸散方	6 銭		5 銭炒			1 銭	3 銭炒	3(6) 銭	1 銭炒								
同方	3(5) 銭		3.9 銭			3 銭	3 銭	3 銭	3 銭								
麻薬方	2 銭				1 銭			1 銭		1 銭							1 銭
又方	3 銭			2 銭	2 銭		10 銭	10 銭	5 銭				10 銭	10 銭	10 銭	3 銭	

処方名	接与木	烏頭	川烏（頭）	当帰	川芎	（天）南星	反鼻	露蜂房	青末葉	紅花	茯苓	芍薬	甘草	柴胡
又方	2 銭	3 銭炒	3 銭	3 銭炒	3 銭炒									
又方	100 銭	350 銭					350 銭	350 銭						
麻沸湯	○	○							○（各等分）					
中上方	○									○（主治打撲，用量記述なし）				
接薬方	4 匁										4 匁（治久頭痛）			
接与木	○											○	○	○ 口（有口伝，用量記述なし）

（麻薬后方　11 味　省略）
○：生薬名を示しているが用量の記述はない

て高く評価されたが，その成立などの詳細については殆んど知られるところはなかった．著者は「青嚢秘録」の写本 39 本を調査したが，3 本は同名異書であった．残りの 36 本について見ると，書写年が最も古いのは46 方の処方を収載する 1814 年の原澤本であり，早稲田大学に所蔵される一本もほぼ同じ頃に完成した写本であると判明した．原澤の識語によって 1810 年には 20～30 方の処方を収載していた写本が完成していたと推定される．恐らく春林軒の門人の一人が春林軒で実際に使用された処方などを備忘録的に書き綴ったものが「青嚢秘録」の初稿本の姿であろう．麻沸散（湯）の処方を収めているのが「青嚢秘録」の特徴の一つであるが，基本的には 6 方の処方が記述され，5 方は中国系統，1 方はオランダ系統の処方である．36 本の写本の収載処方数は殆んど 200 方前後であり，50～150 方を収載した写本が現存していないことから推測すると，ある時点で処方数が幾何級数的に増加したと考えられる．原編纂者は依然として不明であり，今後の研究が期待される．

稿を終えるに当たり，研究で使用した写本の閲覧に際し，多大な便宜を与えていただいた下記の個人と施設に対して深謝の意を表する．

京都大学附属図書館（富士川文庫），慶応義塾大学メディアセンター（富士川文庫），研医会図書館，公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋，神戸大学附属図書館（砂地文庫），滋賀医科大学附属図書館（河村文庫），高橋　均博士（高橋コレクション），内藤記念くすり博物館（大同文庫），早稲田大学図書館．（五十音順）

参考文献および注

1）梶谷光弘．華岡青洲門人石堂鼎と妹背家―華岡家を支え続けた功労者―．日本医史学雑誌　2014；60(1): 37–48
2）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 381–386
3）華岡青洲．丸散便覧．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏 360-3169-8（本書は種々の異なった題名を有する）
4）華岡青洲．禁方拾録．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏 360-3169-11，12
5）華岡青洲．瘍科神書．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏 360-3169-1
6）華岡青洲．瘍科瑣言．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏 360-3169-2
7）華岡青洲．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏　360-3169-1~15
8）華岡青洲．青嚢秘録．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏 360-

3169-9
9）小林定誠．春林軒廿一種集序．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号杏360-3169-1．1丁表–2丁裏
10）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p.381–430
11）関場不二彦．西医学東漸史話（下巻）．東京：吐鳳堂書店；1933．p.290
12）大鳥蘭三郎．明治前日本外科史．日本学士院日本科学史刊行会編．明治前日本医学史．第四巻．東京：日本学術振興会；1964．p.807
13）大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成30．華岡青洲一．東京：名著出版；1980．p.1–135
14）宗田　一．収載書解題．大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成29．華岡青洲一．東京：名著出版；1980．p.59
15）中川　故．「禁方（拾）録」凡例．本間玄調撰．春林軒二十一種十集．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏360-3169-11．2丁表–4丁表
16）廣田　泌．「続禁方録」序．本間玄調撰．春林軒二十一種十集．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏360-3169-12．1丁表–2丁表
17）松木明知．華岡青洲による「瘍科神書」の成立とその各種写本に関する研究．日本医史学雑誌　2017；63(3)：275–292
18）松木明知．華岡青洲の「瘍科瑣言」の成立とその写本の系統に関する研究．日本医史学雑誌　2019：65(3)：279–300
19）松木明知．華岡青洲の「青洲医談」に関する研究―諸写本の書誌，成立，内容，異名同書についての考察―．日本医史学雑誌　2019：65(1)：19–42
20）山田慶児．夜鳴く鳥．東京：岩波書店；1990．p.237
21）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p.46–47
22）三国志（百衲本二十四史　六）方技傳二十九．台北：台湾商務印書館；1967．p.4605
23）後漢書（百衲本二十四史　五）列伝七十二下．台北：台湾商務印書館；1967．p.3820
24）諸橋徹次．大漢和辞典　縮冊版　巻十二．東京：大修館書店；1968．p.114
25）晋書（百衲本二十四史　七）列伝四十二．台北：台湾商務印書館；1967．p.5455
26）補訂版国書総目録．東京：岩波書店；1990．p.103
27）松村　巧．華岡青洲関連資料・高橋コレクション史料目録．和歌山大学教育学部紀要人文科学．2013；(63)：115–178．当該資料の番号は「資料番号91」
28）大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成29．華岡青洲一．東京：名著出版；1980．大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成29．華岡青洲一．東京：名著出版；1980．p.59　p.449–508
29）松木明知．「乳嵒姓名録」によって判明した春林軒の乳癌手術に関する新知見．日本医史学雑誌　2017；63(4)：371–388
「乳嵒姓名録」の148番目，「乳嵒姓名録」の149番目が松原定碩妻である．
30）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p.408–411
31）原澤誼文仲．梧窓漫筆続篇序．国民図書株式会社編．日本随筆全集．第17巻．東京：国民図書；1928．p.231–238
原澤は序の中で「又紀に拖り，華岡随賢に学び，歹割の奥を獲る」（原漢文）とあるが，青洲に関連しての記述はこれだけで「青嚢秘録」に関連しての言及は何もない．
32）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p.461
33）梶谷光弘．華岡直道・青洲・鷺洲・厚堂が主宰した華岡家へ入門した門人たち．華岡青洲研究事業研究論文　2017；(1)：16
34）現在の知見では，著者が下記の著書においてカラー写真で覆刻した野村　鄂の「青洲先生療乳嵒記」が「麻沸湯」の語が披見される最も古い文献である．松木明知．華岡青洲と「乳嵒治験録」．弘前：松木明知；2004
35）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p.464
36）本間玄調撰．春林軒二十一種八集．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏360-3169-8　所収
37）華岡青洲．春林軒二十一種．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号　杏360-3169-9，1丁裏–2丁裏
38）大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成30．華岡青洲一．東京：名著出版；1980．p.34–37
39）松木明知．中川修亭の『麻薬考』の書誌学的研究―四種の写本の検討―．日本医史学雑誌　1999；45(4)：585–599
40）松木明知．新出の中川修亭編「麻薬考」写本3本の書誌学的検討―「麻薬考」の成立と7種の写本の系統―．日本医史学雑誌　2017；63(1)：61–69
41）各務文献．整骨新書．1810．巻之下．56丁表，裏
42）松木明知．華岡青洲の撰による「続禁方録」に関する研究．日本医史学雑誌　2018；64(3)：281–297
43）松木明知．華岡青洲の撰による「禁方（拾）録」に関する研究．日本医史学雑誌　2018；64(3)：257–280
44）曽根玄達．春林軒留塾奇方集．（宮城県立図書館小西文庫所蔵　請求番号N494-ハ1）1815年（文化12）4丁裏．

A Bibliographical Study on *Seinohiroku* Compiled by Seishu Hanaoka: Focusing on Early Manuscripts and General Anesthetics

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Seishu Hanaoka collected extra-traditional herbal prescriptions (ETHPs) because he considered the ETHPs as extremely important in his practice of medicine. Although Gencho Honma, one of the leading disciples of Hanaoka, re-edited *Seinohiroku* in 1850, describing 224 ETHPs, its bibliographical detail has remained unknown. I made a meticulous investigation of its thirty-six manuscripts. The manuscript transcribed by Yoshimi Harasawa in 1814 is the oldest among them. According to his preface, the original manuscript is most likely to have appeared as early as 1810, mentioning more than twenty ETHPs. Most manuscripts describe six general anesthetics with five anesthetics out of six originating in Chinese medicine, and with one in Dutch medicine. In this paper, I discuss bibliographies, titles, and contents of *Seinohiroku*.

Key words: Seishu Hanaoka, *Seinohiroku*, Yoshimi Harasawa, general anesthetics, extra-traditional herbal prescriptions